

『寄り廻り波』は眠れない

1999年3月3日

埼玉大学教育学部経済学研究室

教員 島岡 光一

目 次

終わりの始まり

死亡記事は語る

戸籍簿は語る

安政の大地震とペリー来航

伊勢暴動と西南の役

『寄り廻り波』は語る

『寄り廻り波』は眠れない

終わりの始まり

島岡榮吉の戸籍簿に次の2行が付け加えられた。

平成拾年壱月貳拾六日午前拾時七分東京都東村山
市で死亡同日親族島岡愛子届出除籍

そして榮吉の名前に大きな×印がつけられた。出生が大正3年8月20日だから、84歳3ヶ月まで生きたことになる。榮吉の遺した死亡記事はこの2行だけである。

しかし、死後、四百字詰め原稿用紙にして2千枚を越える未発表原稿が発見された。その中に『寄り廻り波』(204枚)と題した文書がある。1986年4月10日脱稿とある。原稿は—署名がなくとも—榮吉のものであることは、ペン習字のお手本のような几帳面な書体で明かである。71歳の榮吉の手になるものである。その年の1月3日に榮吉は妻サダ子を亡くしている。この原稿はいつ頃書き始められたものか不明だが、主要な部分はサダ子死去後、三ヶ月余りで書かれたものだろう。亡妻への追憶と悔恨のうちに書かれたものにちがいない。

寄り廻り波(寄り回り波)とは、富山湾の魚津、滑川地方の蜃気楼、埋没林、蜃いかと並ぶ四大奇現象の一つで、冬季、季節風が吹いた後の2、3日後、風もないのに、突然海が盛り上り、寄り廻りながら、大波が海岸に押し寄せる現象である。このため大きな被害が出ることもあり、半世紀もせずに海岸線をすっかり変えてしまうくらいに海岸を激しく侵食するので恐れられている。この四現象とも北アルプスの立山連邦から流れ下る清冽豊富な水を原因とする。

巨大地震は、プレートとプレートが互いにもぐり込み合い、長年ひずみが大きくなって、溜まったエネルギーが一気に放出されることで、その後断層が形成され、余震が続く。それに似て、世の中の変動というものも、外見上の平穏な状態のうちに、突然の大乱状態に至る「世直し」のためのエネルギーが蓄積されていることがある。水が1気圧100前後で沸騰するように、分子レベルのミクロな人々の運動量が増大し、ある閾値に達すると、ゆらぎや共鳴によって、制度レベルのマクロな様相全体を一変させてしまうことは非常に広く観察されることである。その様相の一変を引き起こす力が外部から加わるか、内部から盛り上が

るかは偶然によって決まる。

死亡記事は語る

1998年には多くの著名人が死亡記事を遺した。80歳以上の死亡記事を拾ってみよう。

たとえば、2月5日には、津軽三味線の高橋竹山が喉頭がんで死んだ。87歳だった。3歳のころはしかをこじらせ失明し、15歳の時に津軽三味線の師匠とともにいわゆる門付け（家を一軒一軒まわって三味線を弾いてお金をもらうこと）をする。戦後の郷土民謡ブームにのって、昭和25年（1950年）ごろ民謡歌手の伴奏者として地方を回った。その後ソロの三味線弾きとして独立し、豪壮華麗な撥さばきは厳しい環境で生きぬく人々の胸にこだしました。

3月27日には、聞き書き作家の山本茂実が急性肺炎で死んだ。山本は戦後間もなく集団就職のため上京してきた若者の人生雑誌「葦」の編集長を皮切りに、総合雑誌「潮」の編集長を務め、その後本格的な作家活動に入った。1960年代末に明治100年祝賀映画を始め多数の歴史物が公刊されたが、いずれも明治天皇や乃木希典など頂点人物が主人公であった。山本はこれに反発し、文字を持たない庶民の明治100年があるはずだとして、テーブルコーダーを背負って農山村に分け入り、人々からの聞き書きの方法をもって独自の歴史物語を書いた。とくに超ロングセラー『あゝ野麦峠——ある製糸工女哀史』は文学としても、歴史学としても価値の高いものであり、多くの研究者に刺激と励みを与えつづけた。

9月6日には、社会派作家堀田善衛が脳梗塞で死んだ。80歳だった。堀田の芥川受賞作品は朝鮮戦争を契機に日本の新聞社を舞台にして戦後日本の危機意識に支えられた『広場の孤独』だった。晩年の『ゴヤ』（大仏次郎賞）は綿密な歴史考証にもとづいた大作であった。小編でも『方丈記私記』は、鴨長明が鎌倉時代への時代の転変を生き抜く生き様を、同時代人の藤原定家の旧体制埋没的な生き様と、そして堀田自らの歴史体験とを重ね合わせて、彼の創作術を凝縮して垣間見せる珠玉の一篇であった。

9月6日には、映画監督黒澤明が脳卒中のため死んだ。88歳だった。黒澤は昭和18年（1943年）の「姿三四郎」を皮切りに、戦後「羅生門」、「生きる」、「七人の侍」、「どん底」、「用心棒」、「椿三十郎」、「赤ひげ」、「影武者」、「乱」など、どちらかというと言葉的な（男性的）と形容されることもある主人公は、常に民衆と歴史とにダイナミックに共鳴している。数々の国際的な賞を受賞しており、世界の映画に強い影響を与え、世界のクロサワと名をほしいままにした。後述する木下恵介とならんで、黒澤明なしには戦後日本の映画史を語るができない。

9月24日には、元総評議長太田薫が前立腺がんで死んだ。86歳だった。太田は現宇部興産の初代労組組合長を皮切りに、昭和30年岩井章が総評事務局長に就任すると同時に、太田は総評副議長に就任し、「太田—岩井ライン」を確立した。33年に総評議長に就任し、経済闘争に主力をおく春闘方式を定着させ、41年まで同議長を務めた。経済闘争に主力をおくといっても「60年安保闘争」などをも指導し、彼の独特の演説口調から「太田ラッパ」と称せられた。晩年東京都知事選に立候補（落選）したり、総評解体—連合創立に反対したりなどしていた。戦後の労働運動を語る際に良くも悪くも太田薫ぬきには語ることができない。

10月12日には、プロレタリア作家佐多稲子が敗血症で死んだ。94歳だった。佐多は早く母を亡くし一家で上京したが父親に職がなく、小学校5年生からキャラメル工場やメリヤス工場で女工として働いた。本郷のカフェ（喫茶店のようなもの）の「女給」として働いているとき、プロレタリア作家集団の中野重治、窪川鶴次郎らと出会い、後に窪川と結婚した。その影響で、彼女は自伝風に『キャラメル工場から』を発表し、宮本百合子らと共に日

本プロレタリア作家同盟婦人委員会委員として活動し、昭和7年（1932年）に共産党日本支部に入党した。戦後、宮本百合子亡き後（昭和26年）民主的な文学運動の指導者として活躍したが、ある時期から日本共産党と訣別していた。

11月11日には、映画評論家淀川長治が心不全で死んだ。89歳だった。中学校卒業後神戸から上京して、映画雑誌の編集者となり、映画会社の宣伝部を経て雑誌「映画之友」の編集長を務め、フリーの映画評論家として独立した。とりわけ淀川に名をなさしめたのは、昭和41年（1966年）から始まったテレビ朝日の「日曜映画劇場」の解説であった。柔らかい関西なまりの「はい、またおあいしましたね」、「さよなら、さよなら、さよなら」と、手をニギニギしてフェイドアウトしていくスタイルは人気を博した。

12月30日には、映画監督木下恵介が脳梗塞で死んだ。86歳だった。木下はなにかと黒澤明（前出）と並び称せられる。奇しくも木下も、黒澤と同じ年昭和18年（1943年）に「花咲く港」（松竹）がデビュー作品であった。戦後「カルメン故郷に帰る」という「戦争未亡人」（戦争で夫を亡くした女性）の悲劇を映画に描いたのを皮切りに、島の女性教師が、戦争が厳しくなる中で十二人の子どもたち交わす交流と戦後の出会いを描いた不朽の名作「二十四の瞳」を昭和29年に発表しその名を不動のものにした。その後、「野菊の如き君なりき」、「喜びも悲しみも幾歳月」などを発表した。いったんテレビ・ホームドラマに転進した後、昭和44年から映画に復帰し、現代の非行問題をあつかった作品「衝動殺人 息子よ」、「父よ！母よ！」、「父」を発表した。黒澤と比較して繊細なタッチ（「女性的」と評されることもある）の作品が多く、酒豪で周囲に多くの映画人を集め、彼らの育成に努めた。

このようなリストをながめていると、戦後が終わりつつあると感じないわけに行かない。ここで戦後とは、「つくづくもう戦争はいやだ」（平和主義）、「自分の運命は自分で決めたい、自分の人生の主人公は自分」（主権在民）という新しい時代のごくポピュラーな気分が基礎にある。あの戦争は主権在君から生じた。だから主権在民でなければいけないのだ。彼らは、このような啓蒙的なポピュリズム（新しい時代の「庶民」が是認する意見や気分）の視点から反省し、古い時代の社会観や歴史観を見なおし、好んで「庶民」を題材に取り上げる。「庶民」こそ歴史を構成する主役であり、主役たちの運命はこの「庶民」との関係によって決定される。また「庶民」の運命は自ら構成する社会や歴史に悲しく押し流され、つぶされるか、はたまた果敢に立ち向かう。彼らは戦後の啓蒙的な大衆の人気者だったから、成功をさめたといえることができる。彼らは古い時代の明治期に確立した体制に青春時代を過ごしたが故に、戦前派の直接の対立物としての戦後派でありえた。1998年はそういう人々が次々死んでいった。

島岡榮吉もその一人であった。しかし彼は成功者ではなかった。榮吉は、彼らが描いた「庶民」として「庶民」の中に埋もれたまま呼吸不全で死んだ。到来しつつある次の新しい時代を呼吸できなくなったかのように。

戸籍簿は語る

ここに榮吉の父島岡勇次郎の戸籍簿がある。本籍地は「富山県下新川郡魚津町（現魚津市）大字新下獺師町七拾五番地」である。勇次郎は明治10年（1877年）4月3日に生まれている。明治41年に富山県中新川郡早月加積村（現滑川市）在住の成瀬外次郎の長女ツヨと結婚する。島岡勇次郎とツヨは男子ばかり5人の子どもをもうけ、後年まで生存したのは勇吉（次男）、直治（三男）、そして榮吉は末子の五男であった。またツヨは、勇次郎との婚外に、斎藤才三（仮名）との間に1女斎藤朝子（仮名）をもうけている。この朝子は勇次郎の戸籍にはない。

（なお以下年号は、紀元を主に、西暦を従に記述する。明治・大正に意味があるからであ

る)

島岡勇次郎は島岡友七と上村きみとの長男として生まれた。両親の姓が異なっている。実は、勇次郎の戸籍簿は昭和3年に作られたものらしく、その父親友七についての記載が実にあいまいなのだ。曰く、

明治元年八月壱八日前戸主友七死亡に因り家督相續届出全日受附

上村きみト婚姻届出年月日不明受附

妻きみト協議離婚届出年月日不明受附

隠居届出大正拾年壱貳月

この記述を現代の単婚家族様式から見て、いくつか奇妙なことに気がつく。第一に、この5行は勇次郎の戸籍簿にわざわざ「父」という項目が設けられていて、そこに記述されている。第二に、父友七の父親も友七である。第三に、相続人の友七の妻とは届出年月日不明で婚姻と協議離婚と同時に受け付けられている。すなわち戸籍簿作成当時の役人の筆跡はすべて同一人によるものだからである。第四に、勇次郎の母の上村きみは島岡きみとなった事実の記載はない。第五に、両名の結婚以前に二人の子どもが生まれていて、三人目はすでにツヨのお腹の中にいる。

この奇妙さは次のように推測される。勇次郎の父友七は、上村きみを「入籍」しないまま長男勇次郎をもうけ、きみと別れた。大正10年ごろに友七は重病に罹るなどのため家督を相続させようとしたが、勇次郎以外に相続させる子どもはいなかった。その子として、つまり法律上有効な婚姻のもとで出生したことにするため、上村きみと島岡友七とは結婚し、離婚したという話を作らざるをえなかった。この時点で上村きみはすでに死んでおり、この話に支障はなかった。勇次郎の戸籍簿が作成された昭和3年の時点で友七が死亡したという記載はないが、何らかの理由で、本人に確かめようもなかったから年月日不明とした。家督相続したからには、勇次郎の新戸籍に友七の戸籍も編入した。

なお友七の父親も友七であるということは、江戸から明治の初めにかけて家督相続は襲名をもかねていたこともあるので、このようなことがしばしばあったと考えられる。二人の友七の間における家督相続＝襲名は明治元年という記載が見られる。そして友七の生年は安政元年6月6日(1854年)と記載されている。ただしこの記述は正確ではない。嘉永から安政への改元は11月27日であるから、友七の生年はいまだ嘉永7年であったはずである。ところで昭和3年に作成された勇次郎の戸籍簿第1ページに次のような記載も見られる。

三重縣飯南郡松阪町大字松阪町作九百貳拾九番

地ヨリ転籍届出昭和参年壱月九日受附入籍

これから見ると、島岡勇次郎は昭和3年に魚津に転籍するまでは伊勢松坂のまつさかちょうざく松阪町作(現松阪市川井町、船江町付近)に籍があり、伊勢松坂は昭和8年までは飯南郡の中にあった。勇次郎は、おそらくこの地に生まれたものだろう。

安政の大地震とペリー来航

榮吉の父方の祖父島岡友七の出生の秘密を探ることは、実はその子の勇次郎、そしてその孫の榮吉の出生の秘密を探ることになる。だから時代はさかのぼり、土地を富山県から離れなければならない。

すでに見たように、生年不明の同名友七という男とみかという女との間に、安政元年(嘉永7年)、伊勢松坂の松阪町作に生まれた。この松阪町作は大正6年当時の地図で見ても、まったくの田畑地帯であったことがわかる(現在は市街地)。

松阪市役所総務課行政係の松林さんの話を聞いた。天正12年(1584年)に、蒲生氏郷が松ヶ島城(後に松阪城)を開いた。氏郷は開府に当って楽市楽座を開いたり、参宮道(伊勢参りの道)を城下町内に付替えたりして、貨幣経済の発達を図ったが、反面農民からの収奪が激しく、後の松阪町作辺りの農民は逃散(中世、近世に領主の誅求に対する農民の反抗手段として他領に逃亡することを言う歴史用語)して無人地帯と化してしまった。そこで松阪が紀伊藩に移封されるにおよんで、紀伊藩はこの地を町家や商人に貸与して、彼らに直接耕やさせ年貢取立てを行った。だからこの地は田畑しかなく、小作人もおらず、人は住んでいなかったはず、と言う。しかし、商人が商業を営みながら、直接耕して年貢を納めることはいかにも難しい。大正6年当時の地図で、松阪町作は川井町という小さな集落によってほぼ東西に2分されていることがわかる。とすると土地の借受人・耕作者が名目上商人であっても、実際はその下で働くものが松阪町作に小屋がけで住んでいたという可能性も否定できない。(無人地域だとすると、ここに本籍地を置いた島岡友七とは、実は住所不定の芸人のような者だったのだろうか、その可能性も否定できない)

伊勢松阪は松阪商人の町として栄えた。松阪商人として名を成したのは、ご用商人のような藩に寄生的な商人ではなく、近江や日野に源をもつ新興商人であった。かれらは「江戸店持ち伊勢商人」と称して、京都から織物・小間物を仕入れ、安南(ベトナム)に起源をもつ松阪木綿(これは上述の松阪町作のすぐ南を流れる阪内川で晒された)や櫛田川上流に産する水銀を原料とした白粉などを、地元から仕入れていた。そしてそれらを江戸に運び自らの店を出して独特の商法で売りさばいて産を成した。その代表的な存在は三井家であって、江戸に越後屋を開き後の三越となった。

友七は松阪木綿を阪内川に晒す仕事をもしていたとしても不思議ではない。

嘉永7年に伊勢松阪地方には大事件が起きていた。それは嘉永7年が11月27日に安政元年に改元されたことと関連する。「安政」とは『群書治要』の巻三十八ある「庶民安政 然後君子安位矣」からとったものだが、少しも「庶民安政」「君子安位」ではなかった。

このころ毎年のように大地震が発生した。前年嘉永6年(1853年)2月に江戸から小田原にかけて大地震があった。友七が生まれた嘉永7年6月6日の8日後、6月14日から15日にかけて、推定マグニチュード7.4の規模で、(現在の地名で)奈良県、京都、滋賀、大阪、岐阜、愛知地方に大地震が起きた。とくに伊勢松阪の北にある四日市地方の被害は甚大であった。松阪も15日の午前2~3時ごろ激しく揺れ、さらに午前7時ごろにはより大きな振動があり、ごうごうと地鳴りがしたという。それ以降7月の盆頃まで毎日のように余震が相次いだ。

松阪に関して市が発行する文書では、地震の対策として、松阪では15日朝、さっそく大火の使用を禁じ、町役人が盗賊や火災防止のため巡回を行った。町内では、外に水桶を置いたり、このときは津波も発生した。夜間は外灯をつけ、通行に際しては拍子木を打つなどの対処をした。また、人々は寺社の境内や川原などの広場に避難小屋を建て、約2ヶ月間そこでの生活を余儀なくされた。とある。4日の地震は関東・東海を中心に約1万人の死者が出た。翌5日は伊勢湾中心の地震で、同文書によると、松阪町奉行所同心久世安庭の公的な被害報告書によると、家屋の全壊49軒・半壊440軒、土蔵の全壊20ヶ所・半壊479ヶ所、けが人2人と、死者はなかったが、そのほか残った家・土蔵・寺社なども少なからず被害を受けたと報告している。

松阪町の豪商の三井、小津、長谷川家なども例外なく被害を受けた。伊勢湾全体では1万戸が倒壊した。

さらに安政2年(1855年)10月2日に起きた大地震は関東、東海、関西におよぶもので、震源地は亀戸から市川間のおよそマグニチュード7の直下型地震であった。江戸の遊郭吉原から火災が発生し四方八方に燃え広がった。被害は江戸城をはじめ大名屋敷、民家、社寺倒壊1万4千戸、死者は7千におよんでいる。ところがそれだけではすまなかった。11月4日午前9時と5日の4時に、マグニチュード8.4という地震が襲ってきた。これらは

「安政の大地震」と呼ばれた。

ところでこうした地震情報は、瓦版(「地震方角付」など)や「鯨絵」、無届の出版物(『安政見聞録』など)が飛ぶように売れ、現代よりもはるかに大きな役割を果たした歌謡、大道芸人、行商人などによる口コミ情報は庶民の末端までいち早く行き渡った。ある歴史家が言っていたことだが、江戸幕府というものは、つまるところ軍事政権であるから、情報の伝達はきわめて組織的で、迅速、広範、正確であった。

震撼したのは地面だけではなく。それよりもはるかに規模の大きい政治的大地震が起こっていた。アメリカ東インド艦隊司令長官ペリーが2隻の大型帆船と2隻の蒸気船からなる艦隊4隻を率いて、まず琉球の那覇(4月)から北上し、6月3日に浦賀に到着し、久里浜に上陸した。

黒船事件はあまりにも有名で、あえてここでそれをふりかえることは避けよう。しかし、当時の空気・気分を伝える文書を紹介する。幕府の役人が軍船の応接に当たった浦賀奉行所与力から聞いた話で、「浦賀新聞」(うらがしんもん)に掲載されたものである。

嘉永六年丑六月三日未中刻、蒸気船二艘、軍艦二艘迅速に乗り込み、千代崎を乗り越へ観音崎近く迄乗りつけ、蒸気船二艘にて軍船を引き来る。其の速やか成る事飛ぶが如し、諸用注進船を遥かに乗り越へ、不図入津に付き、浦賀中の騒ぎ鼎の湧く如し

島岡家の家系図

島岡友七

(?—明治元年)

みか

(?-?)

島岡友七

(安政元年—S?年)

上村きみ

(?—?)

島岡勇次郎

(M10年—S19年)

成瀬)ツヨ

(M13年—S17年)

島岡義則

(M37 - M39)

島岡勇吉

(M38 - S45)

柴垣直治

(M41 - S51)

?

島岡榮吉

(T3 - H10)

斎藤朝子

斎藤才三

(三隅)サダ子

島岡光一

島岡眞

(S18 - S21)

島岡愛子

島岡義典

(S23 - S23)

(T) 佑子

注進船（役所に報告に走る舟）の動力は帆掛け舟の風だったのか手で漕ぐ櫓だったのか。それに対して蒸気船に曳航された帆船の速さは“飛ぶようだった”のである。

町中へうちいでみればどうぐやの よろいかぶとのたがねうれつゝ
（久里浜にうちでても、黒船には文字通り「刃」が立たないので町中を見てみれば道具屋に置いてある鎧兜の金けの部分だけが売れてしまう）。

日本を茶にして来たか蒸気船、たった四杯で夜も寝させん アメリカが来ても日本つつがない（茶を飲むということは一服するということと、おちゃらかすということとをかけている。
「つつがない」とは大丈夫という意味と大砲がないとをかけている）。

この翌年嘉永7年（1854年）5月に下田条約こと日米和親条約付録13カ条が調印された。そこで、打ち続く大地震、禁裏御門炎上、ペリー来航と開港のため、「安政」と改元されたわけである。近代日本の誕生とともに島岡友七は誕生した。安政の大獄で刑死した（安政6年10月）吉田松陰の「^{そうもうくつき}草莽崛起」（すべての草よ、萌え出でよ）の思想に奮い立った多くの若者は農村からもあい次いだ。「世直し」ブームが起き、安政4年に江戸ではやった風邪にさえも「世直し風」と命名されるようになったくらいである。地震でも風水害でもインフルエンザでも何でもいから、「世直し」だ、「世直し」だ、という気分がここに表現されている。

松阪暴動と西南の役

巨大地震が起きるときのように、古い制度を支える何かが弾け飛んだのである。

島岡友七は14歳のときに明治維新（1968年）を経験するが、はたして伊勢松阪の田畑地帯に住む友七の耳に維新の音がどのように聞こえていたかは不明である。そして明治元年に先代の友七から家督相続を受けている。つまり14歳で父なし子となったが、家業を継ぐだけの力あるいは流浪の途に出る力があっただろうか。浮き草の思いをしたことだろう。

ここでは、日本近世から近代への移行期を、嘉永6年（1853）年の黒船来航から始まって、慶応3年（1867年）の大政奉還・王政復古大号令を経て、慶応4年（＝明治元年）の戊辰戦争で京都政権の優位が確立し、明治政府の全国制覇が完成する西南戦争の終焉（明治10年）に、至る約24年間としておこう。

23歳となった島岡友七は、明治10年（1877年）4月3日に上村きみとの間に勇次郎をもうけた。さてこの時期である。その前年師走、明治9年12月18日、友七の住んでいた松阪町作から南約5.5キロにある櫛田川の川原に近隣五か村の農民が千人ほど終結していた。翌19日には、これを聞きつけてさらに他の村から農民が駆けつけ、1万人に近い農民に膨れ上がり、市街地に進出して、暴徒と化した。三井銀行も襲われた。県当局は土族を召集してにわか軍隊を編成し、農民と対峙した。農民側は飯野郡42ヶ村の総百姓の請願書を県に認めさせ、解散した。しかし、その後も伊勢全域で打ち壊し・焼き討ちがあい次ぎ、2日に至り、ようやく鎮まったが、暴動による被害は、家屋2300戸、物件被害額概算140万円（今の価額で約700億円）、処罰を受けた者は約5万人、つまり暴動参加者の一族ぐるみで処罰されたのである。これが伊勢暴動と呼ばれている（前出の市発行の文書から）。

この種の暴動は和歌山県や茨城県でもあい次いで起きている。要求は共通している。明治6年に布告された地租改正令は、豊凶にかかわらず地価の3%を課税し、これを金納とするというものであった。その地価は5月に算定通告される。これでは、かりに秋に凶作のときに米が穫れない、穫れても品質が悪く米の値崩れが起きているときでも地価の3%の定額でお金を納めなければならないことになる（地価の3%という数字は低いと感じる人もいるかもしれない。しかし地価算定の仕方の中からくりを見ればとんでもない税率だということが分る。ある面積の土地から1石穫れ、それを計算を楽にするために6円だとする。これを土地という資本を貸し出した金利に等しいとみなす。次に銀行の貸出し金利が6%だとする。そうすると地価は6円÷6%すなわち百円と定められる。地価の3%の地租とは100円×3%であるから、3円となる。つまり五公五民というわけである）。事実、この年の9月に櫛田川が決壊し、稲が大きな被害を受け、水浸しで品質が低下し、米価が暴落していた。明治政府がこの年の5月に例示した地価で地租を算定すると、1石（150kg）につき5円19銭納入しなければならない。しかし、このころ米価は山田（伊勢市）相場で見ると1石3円33銭まで暴落しており、水浸し米になると2円以下に買いたたかれた。1石（150kg）つまり現金収入の税率は事実上260%以上というとんでもない額になるわけである。

竹槍でどんと突き出す二分五厘

政府は明治10年1月4日（参賀日明け早々）に布告を出して、地価の算定方式を変えないが、税率を2.5%へと減免することとした。処罰者が多数出たにもかかわらず、この川柳は農民の凱歌として残っている。

それから間もなく、明治10年1月30日、鹿児島県の私学学校生徒の政府施設襲撃事件で、西南の役が幕が切って落とされ、2月15日の西郷隆盛は挙兵した。政府は各地の鎮台兵を動員し、海軍の艦船をすべて投入した。2月22日に、西郷軍は熊本城を包囲したが、3月に入ると政府軍が熊本北方に接近してきたので、西郷軍は軍の一部を差し向けて田原坂で政府軍を迎え撃った。しかし3月20日に、政府軍が田原坂頂上を獲保し、西郷軍は熊本に退いた。この田原坂の攻防がこの戦争全体の勝敗を決した。4月14日、黒田清隆率いる政府軍が、熊本城を包囲している西郷軍を大包围し、西郷陣を抜き敗走させた。西郷軍がなお根強く抵抗し、政府軍はこれをなかなか壊滅することができなかったが、9月24日にいたってようやく西郷軍を鹿児島の城山に追い上げた。ここで西郷隆盛は自刃して西南の役は終わった。

西南の役を記事にした新聞雑誌、とくに「東京日日新聞」の福地源一郎や「郵便報知新聞」の犬養毅らの従軍記事は飛ぶように売れた。早くも12月には大阪の芝座で『西南夢物語』が上演され、明治11年には、東京新富座で『西南雲晴朝東風』と題して、団十郎が西郷を好演し、80日間大入りが続けた。西南の役はこのように一般の人々の口の端々にのぼる持ちきりの話題だった。伊勢松阪の農村にもこの報せが刻々と届いて暴動参加者たちを興奮させたであろう。

伊勢暴動のときにすでに、翌年の4月3日に勇次郎を産んだ上村きみはみごもっていたはずである。伊勢暴動や西南の役などの地元・全国の動乱のさ中に島岡友七は上村きみと青春の血をたぎらせたにちがいない。しかし友七は上村きみを「入籍」しなかった。いやできなかった。友七は伊勢暴動に参加して処罰を受けたかもしれない。あるいは農耕従事者として雇われていた商人に解雇されたかもしれないからである。上村きみは友七の主家の雇われ人が身分違いの女性だったかもしれない。きみは子どもを産んで、婚姻入籍しないまま友七とともに勇次郎を連れて故郷を逃れたのかもしれない。あるいはきみは勇次郎を友七に託す形で、事実上夫と子どもを捨てたのかもしれない。いずれにせよ、上に下への物情騒然たる明治体制最大の危機のさ中に、友七と（あるいは上村きみも）勇次郎は現在の国道166号線をたどり高見峠を越えて奈良から、大阪にへ逃れた（あるいは上った）と考えられる。というのは戸籍が語る勇次郎以外に、彼を語るものは『寄り廻り波』以

外にない。そこにさっそうと登場するのは浪花節語りとして大阪の吉田奈良丸の一番弟子吉田奈良友としてである。「友」はいうまでもなく勇次郎の父である友七の「友」である。伊勢松阪の暴動、上村きみとの離縁、そして大阪の吉田奈良丸の三題話を完成させるための想像力の産物である。

時代ははるかに下り、勇次郎が昭和3年に転籍して戸籍簿を作った富山県魚津地方は勇次郎の古里から遠く離れ、ツヨの実家近くである。伊勢松阪と魚津とは地図上飛騨山脈や伊勢湾によって隔てられている。通常の婚姻圏から遠くかけ離れている。また結婚と出産とがずれている。勇次郎とツヨとは明治41年（1908年）に結婚したことになるが、長男は戸籍に記載がないが位牌の記録を照らし合わせると明治37年に義則という長男をもうけ、さらに明治38年に勇吉をもうけている。さらに3男の直治が生まれるのは結婚入籍の一ヶ月前である。つまり勇次郎とツヨは結婚入籍以前に2児をもうけ、直治の妊娠を期に入籍しているわけである。出産と同時に死んだとされる4男（戸籍上の記載はない）と5男の榮吉だけが婚姻入籍後の誕生である。その上、ツヨは婚姻中別の男性斎藤才三との間に朝子をもうけている。

いったい勇次郎とツヨはどのようにして結ばれ、どんな結婚生活を送ったのであろうか。そのことは榮吉がどのようにして生まれ、どのように命の灯を点したか、という疑問と表裏の関係にある。

友七と上村きみとの結婚・出産にまつわってあったかもしれない過酷な運命が、島岡勇次郎とツヨとの間に再現されたのかもしれない。

『寄り廻り波』は語る

『寄り廻り波』は次の書き出しで始まる。

九月中旬を過ぎると、照りつけた八月の暑い太陽が、いくらか夏の余熱を残して、北アルプスの立山連邦を越えて、南の方へ立ち去ったようである。

この季節ともなると、越中平野にひろがる田圃の晩稲も、ぼつぼつ刈り穫られ、刈り穫ったあとの田圃のあちこちに構築された稲架という乾燥設備に、刈り穫った稲の束を、ぎっしり並べ掛けてあった。……（中略、以下同様——筆者注）北陸本線滑川駅は、小さな田舎町の駅だった。この駅で下車した少年と幼児がいた。少年は十二歳で、その少年の背中に、痩せ細った栄養不良のような三歳になる幼児が、顔が蒼白く、目が落ち窪んで、何者かに怯えているかのような表情で背負われていた。少年は勇吉と言った。背負われている幼児は榮吉と言う。

滑川から一里半（六キロメートル）の田舎道を、勇吉は幼児の榮吉を背負ったり、時には歩かせたりして、母方の実家へ急いでいたのだ。

もちろんこの二人は兄弟である。

ここで「母の実家」とはツヨの実家で、現滑川市の東端の早月加積村に住む成瀬外次郎・フクの家である。この後に続く語りの中に、勇吉（12歳）はその成瀬家に近づくにつれて「冷酷な」祖父（外次郎）の顔を思い浮かべて憂鬱になるとか、「勇吉達の母を勘当したあの祖父」という言葉が聞かれる。つまりツヨは父に勘当されていたのである。勇吉の憂鬱は次のような思い出とかかわる。

それは二年前のことである。十二月も押し迫った年の暮、降りしきる雪の中を、当時十歳の勇吉と六歳になる弟の直治が、鉄道小荷物の荷札を胸につけさせられ、その荷札に、次のように行き先が書かれてあった。

富山県中新川郡早月加積村字中村八一七

成瀬外次郎 様行

下車駅は滑川駅となっていた。

なんと勇吉と直治（史実的には直治はここで7歳のはず）は生きたまま小荷物として、母親ツヨの実家の最寄駅に送られたのである。送り主を『寄り廻り波』はすぐに明かにする。ツヨである。彼女は金沢駅の拡張工事の雑役婦として働いていた。勇吉と直治を小荷物として送ったとき赤ん坊の榮吉を抱いて涙を拭いていたという。滑川から6キロの道、大雪の中を二人の少年はおきつまるびつ歩きつづけ、祖父母のもとに転がり込んだ。祖母のフクは暖かく歓迎したが、祖父は激しく憤り冷酷な態度をとった。

「祖父の家は、村でも最低の貧農だった」と『寄り廻り波』は語る。なお『寄り廻り波』はツヨを「ちよ」と発音している。（以後筆者の地の文ではツヨ、『寄り廻り波』の語りではちよと書く）

ちよには10人のきょうだいがいて、一番長女だった。当時、貧乏人の子沢山とあって、満足に食わすこともできない癖に、子供だけは一人前に産む、などと一般世間の者が蔑んだりした。だが、祖父は、「子供は七、八歳になったら金になる」と嘯くのである。

祖父の言うとおり、ちよは、七歳のときに子守奉公に出された。それは一年間で、玄米三俵（一俵六十キロ）の約束だった。それが祖父の家計にとっては、貴重な収入だったのだ。

……

（祖父は——筆者注）小作人組合と称する仲間には頑として加入を拒否した。それは、小作権をめぐる闘争にむすびつく非合法運動は、却って小作人を苦境に追いやる自縄自縛的な行為である。と反発した。一方地主に対しても強硬な態度を取りつづけていた。

耕作反別の四割は沼田である。暗渠排水の工事も施されていない田圃にも、他の田圃と同じ価値で六割の年貢はひどすぎる。半分にせよと折衝していたのだ。しかし、地主は一貧民である小作人の要求など取り上げようとしなかった。もし、不満なら田畑を全部返還せよ。とまで言って来た。

しかし、地主から契約解除の内容証明の郵便が送達されても、祖父外次郎はこれに屈しなかった。内容証明が送達された次の夜、地主宅へ棺桶を背負って訪れた。たしかに契約解除の通告を受け取った。それに従えば、我が家は死に絶えると同じだ。地主さん、あんたから田畑を取られるのだから、俺はこの場で死ぬ。棺桶も準備してきたので、これからこの中に入る。入ったら喉を突く。そしたら蓋をしてもらいたい。あとは地主さんにまかす」

そういうと、手拭に巻きつけていた出刃包丁を、右手に持って棺桶に入った。

この勝負は地主の負けであった。『寄り廻り波』は、このような頑固一徹だが筋を通す祖父だったから、彼が勇吉達の母親のツヨを勘当したのには一理あった、と言う。

『寄り廻り波』をフィクションと見るか自伝と見るか難しい。フィクションとして見ると、当時の史実と噛み合わない語りは排除されなければならない。仮に自伝としても、本人自身記憶していない部分を、伝聞や調査によって確かめ、想像力を羽ばたかせて記述しなければ

ならない。いずれにせよ、史実とつじつまを合わせるためには、若干の修正をしないとどうにも理解できないところがある。

次に見る「明治36年」と言えば、ツヨが23歳、戸籍からさかのぼって推定するに、この年に勇次郎とツヨとが事実婚をする年だが、『寄り廻り波』の語りでは19歳となっている。そこで年齢の記憶の方が正確だとすると、この年は明治32年でなければならない。またそうした方が他の語りとうまくつじつまがあう。そのことを念頭において、『寄り廻り波』に語ってもらおう。

一九〇三年（明治三十六年）この時代の娯楽と言えば、浪花節が盛んであった。夏になると、村の神社の境内で、浪花節納涼興行が催された。七、八月のうちで二十日間の興行がうたれた。

祖父の外次郎も、浪花節が大好きだった。ことに関西浪曲師、吉田奈良丸の一番弟子、吉田 奈良友を贔屓にしていた。奈良友は師匠に劣らぬ人気があった。声量が豊かで、芸が達者な上、浪曲師になくてもならない人懐っこい人柄だった。その上美男で、髪は由井正雪のように肩まで垂れて、若い女達から、思わずため息が洩れてくるとさえいわれた。

これがあの島岡友七の息子島岡勇次郎の姿だったのである。22歳（「明治36年」を明治32年と修正して）だった。関西の吉田奈良丸一門として興行を張っていた。吉田奈良友を贔屓にしていたのは、ツヨの父外次郎だけではなく、母のフクも熱心なファンで、滑川の北13キロ口海浜にある小さな町生地の簡易旅館に寝泊りしていた吉田奈良友に、わざわざ会いにいったと現地で伝えられている。だが、この伝承はどうも別の筋の話とごっちゃになっているので、直ちには史実とはいえないが、フクも奈良友を熱烈に贔屓にしていたことは事実である。だからこの後、長女ツヨと勇次郎—吉田奈良友—との間に起こることに父母ともに責任があるというべきである。

『寄り廻り波』は、19歳のツヨの胸の内を語る筆致は細密で陰影が濃い。この年、奉公先からお盆帰りで三日間の暇をもらって実家に帰ってきていたツヨは、吉田奈良友の浪花節を聴く機会をもった。『寄り廻り波』語る。

若いちよ（ツヨ——筆者注）の心の奥に動揺が起きた。七歳という幼い頃から、子守に、女 中にと十年余にわたって抑圧下の人生を過ごして来たちよにとって、自分自身もどうしてだか分からないまま吉田奈良友の姿が焼きついてしまった。お盆休みの最後の日に、ちよは納涼興行の仮設小屋を訪れた。ようやく日が暮れかかる七時ごろだった。興行の人達が境内に蓆を敷いて客待ちの作業を行っていた。仮設小屋の中には、奈良友のほか三名の浪曲師が、それぞれ忙しそうに夜の興行の準備をしていた。

「あの一」

見るからに田舎風の娘が、小屋の入り口で、なんとなく羞らいがちに立っている。

「あんた、何の用事だね？」

……

奈良友が舞台衣装の身支度をしながら、娘の立っているところへやって来た。

……

ちよも一目惚れとはいえ、奈良友に対して死ぬほどの思いで恋い焦がれてしまったのだ。

「どんなご用件でしょうか。わしがこの一座の一応責任をもたされておりますが、何か興行の事でのお話でしょうか？」

「いいえ」

ちよは、奈良友と直接言葉を交わすだけで、心臓が早鐘のようにうった。

.....

(ちよは無我夢中で奉公先に帰った——筆者注)

しかし、ちよの胸中には、奈良友の面影が離れようとしなかった。

.....

それから一年が過ぎ、ちよが、待ちに待ったお盆がめぐって来たのだ。今年も、村のお宮の境内で、奈良友の興行がかかるものと思って、奉公先の主人に、お休みの許しをお願いしてあった。そのお盆休みの前夜に、ちよは主人夫妻に呼ばれていた。

ちよは、7歳のときに子守に出され、洗濯、飯炊き、12歳以降農作業との13年間の苦役のなかで、従順そうに見られる挙措振舞いを身につけていた。美人ではなかったが健康そうな浅黒い肌にしとやかな振舞いには男心をそそるものがあった。そして「可愛い黒い瞳の奥に」、「何にも恐れぬ女にあるまじき厳しさが」、「ときにはぴかっと光るものを感じるのである」と『寄り廻り波』は語る。

「奥様、なんの用事でございましょうか」

ちよのことばの中に、いくらか構えが感じられた。

「そうね、まあ話というのは、ほかでもないが、おまえのことについてだけだね」

「.....」(ママ)

「長年ちよがよく働いてくれて本当にありがとう。まだ、これからもこの家のために働いてもらいたいと思っているんだけどね。しかし、ちよも二十歳になったし、この辺で世帯を持って

はと思ってね。それで、おまえの気持ちも聞いてみたいと思って、呼んだわけだが」

「.....」(ママ)

あまりに突然の話に、ちよはどぎまぎした。

「それでね、この話については、お前の両親にも話をしておるんだけど、両親も私達にお任せします。というご返事をもらっているんだよ」

親とも話が済んでいる。ちよは胸中動転した。

ちよは、親孝行娘として村中評判だった。その孝行娘であるちよが、親の言い付けに反くわけにはいかない。親は奉公先の主人に任せたとなれば、それに従わねばならない。

奥様に紹介されたのは隣村の元庄屋のところで働いている4歳年上の男性で、ツヨもよく知っている庄吾という人だった。上の空で話を聞いていたちよに飛び込んできたのは、次のような奥様の言葉だった。

「とにかく両親とよく話をしてお、よい返事を待ってるよ。庄吾さんと結婚が決まれば、その費用のすべてを私の方で出してあげるし、それに、5反分(約5千平方メートル——筆者注)の田畑を、5年間年貢なしで耕作させてあげようとも思っているんだよ」ツヨは庄吾という人には好感をもっていたが、異性としてではない。結婚など思いもおよばなかった。

七歳の時から子守、洗濯、飯炊き、十二歳の時から田畑に出て農作業するなど、13年間労働と忍従の生活を強いられたのだ。時には便所で用をたしているうちに眠ってしまうことも、しばしばだった。だからちよにしてみれば、この十三年間、ほとんど楽しみというもの何一つなかったといってもいい。

もうこんな生活から逃げ出したい。学校に行っていないので文盲である。それに女の身であるが、自分がやりたいと思うことは、自分の意志でやっても良いのではないか。

ちよの脳裡には、吉田奈良友の面影がやさしくちよを抱きしめている。浪花節語り

の一座に入って、何か自分もできることがある。そして、旅から旅を渡り歩くことも、自分を開放したいからだ。村一番の孝行娘の好評に縛られて、このまま埋もれてしまうのは、もう沢山だ。

庄吾という人は良い人である。結婚して農業をやるのも良いかもしれない。身内のものはもちろん村の人達も祝福のことばを送ってくれることだろう。だが、これまでの生活環境から抜け出せないのだ。五反歩の年貢は五年間免除するとはいうものの、これまでどおり、奉公先の手伝いやいろいろの指図に、忠実に従わねばならないのだ。いうなれば、相変わらず奉公人に過ぎない。そんなしがらみから完全に抜け切りたい。なんとか奈良友のところに行きたい。

ツヨが持とうとした自分の「意志」とは、正しい「農民」、正しい「奉公人」、正しい「女」が持つてはならないものであった。親きょうだい、親戚、村人たちから猛攻撃を食らうだろうことは明かである。

ツヨは悶々として盆休みの前の夜を過ごした。

浪花節語り、などといえば、旅から旅へ流れて暮らす川原乞食だと蔑まれた時代だったのだ。朝星をいただき、夜月の光で働く人々こそ正しい人間である。芸ごとを商売にする人間は、下賤な道楽者（遊び人）としか考えなかった。でも、その人達の芸を見たさに多くの農家の人達が集まってくるではないか。少なくとも、今の自分よりも、はるかに自由があって、これまでのような奴隷のような惨めさがなかつとちよは思った。

自分自身の「意志」を持つことに、ツヨにどんな教養があるわけでもなかった。本能に近い部分から湧き出る若い情念に突き動かされていた。「一生地主の奴隷」として平和に暮らすのか、「川原乞食」の自由に身を投ずるのか。彼女は両親の懷に抱かれるのならでしたが、その両親が貧窮のために彼女を売ろうとしている。それなら吉田奈良友の懷に飛び込もう。当時寄り廻り波に飛び込むことになるとは彼女は気づいていない。奈良友はちよにとってその自由と同義語だった。忠孝という古い型のしがらみではなかった。主家や親への忠孝に忠実ならんとするか、自分の「意思」に忠実ならんとするか、の新しいタイプの選択の苦しみなのである。

奉公先を出て実家に出発するときには、彼女の決心はついていた。

ツヨの両親は彼女の結婚話にとても喜んでいて。しかし、帰宅して見ると、彼女が予想した親の壁よりも前に、小さな蹉跎が待っていた。吉田奈良友が神社で興行を張るのを楽しみに一年を暮らしてきたのに、浪花節ではなくて講談とか手品になっていた。ツヨは茫然とした。ツヨが母フクに尋ねた。フクは答えた。「今日から魚津町の恵比寿座で、浪花節がかかるそうさ」。それは吉田奈良丸一門だという。ツヨはフクに言った。「母ちゃん、あたし魚津へ買い物に行ってくる」。ツヨは、吉田奈良丸一門の者に訊いたら、奈良友の消息がわかるだろう、と思ったからである。ツヨは魚津に向かって家を出た。

それ以来、ちよの消息が途絶えてしまった。と『寄り廻り波』は語る。明治33年（1900年）の夏のことだった。

『寄り廻り波』はここで冒頭のシーンにもどる。大正6年、当時12歳の勇吉が、実母のツヨの意を受けた何者かに手紙で金沢に呼び出されて、祖父母に無断で、まだ3歳になるかならないかの榮吉を連れて祖父母の元へ富山湾の海岸線を歩いていた。隣家の女性に、実家

に無事でいるであろう勇吉に手紙を書いてもらった。あるいは隣家の女性が自発的に、「榮ちゃんが危ない。預かっているから引き取りに來い」と勇吉に書いたかもしれない。勇吉は祖父母に内緒で榮吉を迎えに行った。当然勇吉に汽車賃があるはずがない。勇吉は歩いた。滑川は富山県東部の海浜にある町である。そこから富山県を西に横切って、くりから峠をこえて、金沢に行くには、祖父母の家から滑川駅まで6キロ、滑川駅から現在の鉄道の距離にして75.5キロ、計81.5キロである。大人の足で20時間余かかる。

祖父は娘ツヨの奉公先から定められたおいしい婚姻を足蹴にして逃亡し、川原乞食の一群に身を投じた娘ツヨ、勘当した娘ツヨから子供3人をあいさつもなく次々送りつけられては、祖父外次郎の怒りは頂点に達するだろう。勇吉にもそれは目に見えている。祖母フクの優しさだけが頼りだ。榮吉は、今いっしょにいる「おにいちゃん」が誰だかまだ認識できていない。ただ、「怖い小父ちゃん」から逃れられた安心感とものすごい空腹感を味わっていた。

ある年の冬のことであった。北陸の雪は例年になく大雪だった。ある朝、寝小便をしたというので、およそ2メートルも積もった雪の中へ放り出されたのだ。慌てて母が助けに行こうとしたが、怖い小父ちゃんが、母に暴力をふるって、これを阻止した。母は雨戸に縋って泣きながら、榮吉の名を呼びつづけていた。昨夜降ったばかりの新雪はやわらかく、もがけばもがくほど、だんだん深みに沈んで行った。榮吉は懸命に母を呼んだ。「母ちゃん！」声を限りに助けを求めた。体はほとんど雪の中に埋まって、辛うじて首から上だけが見えるだけとなった。

われを忘れて母は雪の中へ飛び込んだ。母は妊娠していたのだ。それを見て怖い小父ちゃんが「バカヤロー」と大声を上げて母を引き戻した。「榮吉が死んでしまう！」気が狂ったように絶叫した。そのとき、隣家の小母さんが、雪を掻き分けて、榮吉の後ろにまわって、右脇に抱えながら、泳ぐようにして助け出し、小母さんの家へ運ばれた。小さな榮吉だったが、このことだけは忘れることができなかった。とにかく怖い小父さんだった。榮吉にとっては父も母もなかった。親にあまえて育ったという記憶がなかったからだ。

ここで登場する「母」「母ちゃん！」とは、自由を求めて吉田奈良友のもとに走った、旧姓成瀬、婚姻姓島岡ツヨのことである。ツヨは妊娠していた。「怖い小父ちゃん」は決して吉田奈良友（島岡勇次郎）のことではなく、ツヨが新たに宿している子どもの父親であることは明かである。この「怖い小父ちゃん」が斎藤才三にほかならない。この時ツヨの身に何が起きていたのか、『寄り廻り波』は語らない。

勇吉は榮吉を連れて、成瀬家にたどり着いた。勇吉にとってほっとしたこと、何よりも恐れていた祖父がまだ野良からもどっていないかった。まず祖母のフクに取り入って、それからその口利きで祖父という本丸を攻略しようという大戦略だった。ところがこの大戦略は裏目に出た。祖母はやせ衰えて怯えている榮吉を見るなり、2年前勇吉と直治が転がり込んだときとは打って変わって、勇吉に頭から罵声を浴びせた。

「バカめ！またじいちゃんの怒らっしゃるようなことをして、おまえらどうするつもりや。おまえらのおっ母はどうしたがや」

「あの……母ちゃんが都合で来られん言うとった」

「なんでじゃ？」

「なんで来られんがわからんです」

「バカめ！……野良猫でも自分の仔をちゃんと育てとるぞ。勇吉、大体おまえ、直治と二人で来た時のことを憶えておろうが。じいちゃんがどんなに怒ったか。それを性懲りもなく、よくもこんな奴を連れて来たもんじゃ」

やさしかったはずの祖母フクは取り付く島もない。フクの怒声に勇吉と学校から帰ってきていた直治は驚き、泣きすがって「榮吉を育ててくれ」と頼んだ。

「おまえらいくら泣いて頼んだって駄目なもんは駄目じゃ。おまえら学校をやめて二人で働いて榮吉を食べさせてやれよ。でもここにはおかんぞ、どっかえ行け。おっ母のところに行け。それが当たり前じゃ。」

頼みのフクがこの調子だ。祖父の外次郎が帰ってきたら榮吉は殺されるかもしれない。勇吉は決断しなければならなかった。フクに丁寧に頭を下げて礼を言い、直治を促し、榮吉の手を引きフクの家をあとにした。フクが仰天した。勇吉は二人を励まし、海岸を北にたどり、天狗岩まで行って日本海の荒海に身投げして死ぬつもりだった。しかし三人が天狗岩の天辺にしがみついたあわやというとき、庄太郎叔父（ツヨの弟）に追いつかれ、救助された。庄太郎に伴われて三人兄弟は祖父の家に戻った。フクが走り出てきて、「このバカたれ」、勇吉を二つ三つ張った。

祖父は野良から帰ってきていた。祖父は、囲炉裡の正面座で、大きなあぐらをかいて、きせるにたばこを詰めながら、ちらっと勇吉たちに眼を向けたが、すぐ元に戻り、いつものように無視した冷たい表情になった。

息子庄太郎や孫の勇吉がなんととりなそうが謝ろうが、外次郎は孫たちをにらみつけるか庄太郎を無視するかの空白の時間が続いた。勇吉たちはいよいよ震えあがった。しばらくして、外次郎はフクを呼んだ。

「なんじゃね、じいさん？」

「この子らの着物が濡れてるがじゃないか」

天狗岩の波の飛沫で全身が濡れていた。ずぶ濡れというほどでもないが、海水のため、からだにベトつくので気持ちが悪かった。

「あれ！どうしたかや、バカたれ！早う奥の部屋へ行って着替えて来んか。榮吉のは、体に合う着物がないけど、少し大きいけど、ちょっと間に合わせに着ておれ、いま持ってくるから」

祖母が奥の部屋へ行こうとした。

「ちょっと待て」

祖父は少々声を荒げて祖母を呼んだ。

「榮吉が、大分体が弱っておるようじゃが、何も食べさせてないが？」

「うちへ来てから何も食べさせておらんよ。大体勇吉のやつが勝手に連れてきて……」

「黙れ！そんなこと聞いておらん。すぐ何か食べさせてやらんか。粥のようなできるだけ柔らかいもんが良いぞ。体が弱っているようやから」

祖母は、着物の袖で顔を覆うようにして泣いた。そして、榮吉の濡れた着物を着替えさせると、痩せ細った痛々しい榮吉の体を抱き上げて、祖父のところへ持っていった。

「じいさん、初めて見る孫の榮吉じゃ。さあ抱いてやってくれっしやい。可愛そうに、こんな痩せて……」

祖母は、「じいさんありがとう」と言いながら、声をあげて泣き出した。

勇吉と直治が着替えると、すぐ囲炉裡の所へ来て見て驚いた。祖父が、榮吉をあぐらの上へ乗せて、榮吉の体を包むように抱いているのだ。そして、大粒の涙が祖父のほほを濡らしている光景を見て、自分の眼を疑う思いがした。

浪花節を地で行く話である。それでは、浪曲師吉田奈良友こと島岡勇次郎は何をしていたのか。彼は勇吉が榮吉を連れてツヨの実家に転がり込んだ大正6年の頃、彼の妻ツヨは他の男と生活を共にして子どもを宿していた。しかも、浪花節と関係がなく、ツヨは金沢駅の拡張工事の雑役婦として働いていた。

『寄り廻り波』の展開は、榮吉と彼の最も若いこと叔母（ツヨのもっとも年若の妹）との

親密な愛情物語に移行してしまい、勇次郎について語ってはくれない。しかし、『寄り廻り波』は、浪曲の歴史を振り返るという形で、勇次郎の身の上に起きた運命のいたづらを示唆している。

「難波ぶし」は江戸末期に関西で流行した。明治20年代になって、祭文、チョンガレ節、三河万歳などの雑芸が合流して、関東で桃中軒雲右衛門や一心亭辰雄（後の講談師服部伸）などによって芸がみがかれ、それからやや遅れて、関西において吉田奈良丸が関東の雲右衛門と並んで、浪曲改革を行った。浪曲は新しい時代を告げる新しい大衆芸の一つとなった。

桃中軒雲右衛門の関東風の豪快な節曲しに対し、一世奈良丸（奈良友の師匠）は哀調漂う女性的な節曲しであった。史実によれば、一世奈良丸は、明治35年に奈良丸の名を一番弟子で番頭格の奈良友にではなく、3歳年下の花川若力に襲名させている。

明治41年（1908年）に、二世奈良丸も美麗な節調で新富座に出演した頃「節の奈良丸、啖呵の辰雄、声の良いのが雲右衛門」と謳われた。そこで『寄り廻り波』は語る。

さらにこれ（一世奈良丸の調子——筆者注）にみがきをかけたのは二世を継いだ花川若力という弟子であった。若力は奈良友の後輩であったが、研究熱心と持ち前の美声で、新体詩風の優美な語り口を、一世の節曲の中に巧みに折り込んで、さらにこれをみがいた。のちに至って、赤穂義士伝を得意とし、その一節をとって「奈良丸くずし」という歌謡が大正初年（正確には大正2年以降の頃である。なお大正初年は二世奈良丸と雲右衛門の全盛期とされる——筆者注）に全国的な流行を見せたほどであった。この功績は二世奈良丸（花川若力）の力であって、明治四十二年（1909年）に、土方伯爵の推薦で東京華族会館で口演し、さらに大正初年に渡米するなど、その活躍はめざましいものがあった。

こうなると、一番弟子であった吉田奈良友の影が薄れてくるのは当然。芸名奈良友を名乗るのも心苦しくなった。彼は悩んだ。ついに彼は、病床にある一世に申し出て、吉田奈良友を返上し、脱門を願い出た。しかし、一世は許さなかった。吉田奈良友の返上を受理し、将来とも吉田一門として、吉田友右衛門と名乗り、吉田一族の名声を昂めるよう、二世と提携して努力せよ。と説諭され、その日から吉田友右衛門と芸名を改め、一世奈良丸の指示外において、友右衛門独自の興行が認められたわけである。

つまり、長年吉田一門の番頭格で働いてくれた恩賞として、吉田家の暖簾を分けあたえられたといってよい。しかしながら、一世奈良丸が奈良友に、恩恵的に吉田友右衛門の芸名を与えたと『寄り廻り波』は語っているが、実情は違ったのではないだろうか。花川若力（二世奈良丸）に浪花節の力があつたことは疑いがない。しかし、奈良友に力がなかったとは思われない。花川若力に名跡を継がせる理由が花川にあり（花川は一世奈良丸と同郷の奈良の出身であった。和歌山県出身という異説もある）、奈良友には何か他の所で、つまり浪花節以外のところで師匠のお気に召さないところをもっていたのではないか。

彼は派手好みの美男であった。若い女性をうっとりさせる力があつた。彼のところに押しかけてくる若い女性がツヨ一人だったとは考えにくい。それを咎めた一世奈良丸が跡目を花川に譲ったのではないだろうか。奈良友にはそれは人生を悲観するほどの屈辱であったにちがいない。

ツヨが奈良友のもとに出奔して3年後に、襲名問題で奈良友の最初の蹉跌があつた。そしてツヨが勇吉、直治、榮吉の3人の奈良友（勇次郎）の子どもを次々捨て（他に二人の男の子を喪っている）、他の男の子を宿し、浪花節と無関係の工事現場の雑役婦として働いていたところ（大正4～6年）とは、二世奈良友が「奈良丸くずし」を流行らせ、中央進出（東京新富座口演）を果たし、広くアメリカに飛び立つ頃にあたっている。史実によれば、二世奈良友は大正六年にも渡米し、アメリカ各地で興行し、ウィルソン大統領との面会まで果たし

ている。ものすごい出世というべきである(『寄り廻り波』には、大正初年に二世奈良丸が渡米した、と語っていたが、これは大正6年の錯覚だろう)。これが奈良友の第2の蹉跌であった。

しかし、吉田奈良友にはドサ興行の声しかかからない。奈良友は師匠一世奈良丸に名跡返上を申し出たのは自然に理解される。改めてもらった名跡は「友右衛門」であったが、ここにも「友」という文字、彼の父親友七の文字が入っている。名跡は師匠が決めるものだろうが、勇次郎の父への追慕の念が見える。しかしより注目されるのは「右衛門」という部分である。これは奈良丸のライバルである桃中軒雲右衛門の「右衛門」に他ならない。史書に残っている桃中軒雲右衛門の写真は髪の毛を肩までに長く垂らしている。『寄り廻り波』が語る奈良友とそっくりなのである。他方二世奈良丸は刈り上げのちょび髭の写真が残っている。つまり、師匠は奈良友を吉田一門の番頭格からも外し、吉田の名だけは使わせるが、ともかく勝手にしろ、というわけである。ほとんど破門に近かったのではないだろうか。

『寄り廻り波』は眠れない

おそらく、吉田奈良友、改め、吉田友右衛門こと島岡勇次郎の生活は荒れ、すさんだのではないだろうか。ツヨは奈良友のもとに押しかけ三年。三味線を覚えた。そして奈良友の子どもを宿した。二人の息子を抱え、二人の息子を喪いながらも、すさむ夫の浪花節に三味線を弾いて共に旅をしていた。しかし、榮吉をお腹に宿すともやは夫について行くことができなくなった。またも不意にいなくなった夫を求めて、子ども二人を連れて金沢付近の山中を歩いている時、ツヨは疲労と心労とで流産の危機に陥って、道端にうずくまった。そこへ飯場の人足頭である斎藤才三が通りかかった。

彼は当初やさしくツヨの面倒を見たが、榮吉が生まれると、勇吉と直治の面倒まで見ることはできないと言った。斎藤才三は荒っぽい人である。勇吉と直治の命に危害が及ぶかもしれない。そこでツヨは、無筆であるから、隣家の女性に頼んで鉄道の小荷物札に自分の実家の住所を書いてもらって、それを子どもたちの胸に括り付けて、父の元に送り届けた。ツヨはその父から勘当されていたにもかかわらずである。この際体裁は二の次である。小荷物として送った方がまだしも二人の子どもの命が救われると思ったからだ。

ツヨは幼い榮吉の命の火を消さないためには、夫ならぬ斎藤を受け入れる以外に他に道があったのだろうか。ツヨは斎藤の子どもをみごもった。しかし、そうになったらそうなら斎藤は榮吉を殺しかかった。ツヨは、みごもった子どもも榮吉も両方の命を守る方法を必死に考えなくてはならなくなった。勇吉たちを小荷物として送った際に住所を書いてくれるから、隣家の女性はツヨの実家の住所をすでに知っている。また隣家の女性は雪の中から榮吉を助けて、斎藤から匿ってくれている。ツヨはひそに日がかりの里程である。勇吉は隣家の女性から、榮吉を受け取り、帰りの汽車賃を借りて、榮吉を連れて滑川にもどった。

これはすべて想像力の産物である。この勇吉の気力と愛情をなんと表現してよいか、言葉を失って想像力が立ちすくんでしまう。

貧窮の中で芽生えた胎内に命を産むという女の宿命と、叩きつける寄り廻り波に浮かぶ小さな命のような自由と、どこで折り合いをつけるか、再び言葉を失って想像力が立ちすくんでしまう。

奴隷のような奉公人・小作人の身分の両親を捨て自由を選んだツヨが、夫に捨てられ、他の男の子を宿しながら、子どもたちを捨てることによって子どもたちの命の灯を点そうとした。どこへ捨てたかという、再び村で一番貧乏な小作人一家、それと親戚、村の人々の元へであった。

貧窮の問題を解決しない限り自由の問題は未解決のままである。しかし、どんな貧窮の中にあろうと人々は命を保護する繭のようなものを持っている。そこに二つの問題を解決する

拠点があるのかもしれない。ツヨは貧窮の中にも、仏の情けを信じていたかもしれない。彼女は自分を殺し、子どもを道連れにする道を選ばなかった。自由を求めた彼女のぎりぎりの意地だった。繭のような人の情けの網物の中に命たちをあえて放り込んだ。それは賭けのような信心であった。繭は、いつでもどこにでもあるとは限らないにせよ、またどんなに貧弱であったとしても、幸い実在したし、機能した。

ちなみに、勇吉に連れられて榮吉が祖父母の元に帰った年の翌年大正7年（1918年）7月から9月にかけて起きた全国的な大暴動、米騒動の発祥の地こそ魚津、滑川であった。

島岡友七、死亡年場所不明

島岡ツヨ、昭和17年魚津町で死亡 島岡勇次郎、昭和19年魚津町で死亡

島岡勇吉、昭和45年魚津市で死亡

（柴垣）直治、昭和51年魚津市で死亡

島岡榮吉、1998年東京都東村山市で死亡

『寄り廻り波』が、その主役たちがことごとく死んでからもなお語りつづける訳は、寄り廻り波は今も荒れ狂っているからである。

『寄り廻り波』は眠れない